



VOL. 30  
タナカリンタロウ  
田中 凜太郎

# LIFE SUCKS

愛すべきキミの人生を教えてください

己の哲学があるが故、時にはアウトローと呼ばれたこともあったであろう、オリジナルな人生を歩んできた人たち。D.I.Y.精神宿その生き方が、気付けば多大なる影響を世の中へ与え、そして一つの文化を生み出した。そんなオルタナティブなヒーローたちを紹介しよう。Vol.29となる今回は、アメリカ在住13年、アメリカンカルチャーに特化したスペシャルブック『My Freedom』を手掛け、さらにここ数年はロサンゼルスでアメリカンカルチャーを中心としたエキシビジョン「inspiraion」をプロデュースする、田中凜太郎の登場だ。

photo:Sadato Ishizuka (<http://sadapoto.com>)  
text:Kana Yoshioka (WARP)  
special thanx:Country Line

## ■音楽好きが高じてアメリカの地へ

お袋の実家である山口県生まれなんだけど、親父の出身地、横浜へすぐ戻ってきて。だから横浜の人間だね。音楽少年でギターをやっていた。10代の頃に、ストレイ・キャッツ出現でロカビリーブームがやってきて、その後には日本ではモッズやルースターズといったパンク、海外ではクラッシュが出てきたんだよね。僕はパンク少年だったから、森山達也(モッズ)、ジョー・ストラマー、プライアン・セッツァーの3人が憧れの存在だった。いまだにモノの考え方がパンクなのはそのせい。それから黒人音楽が好きになった。ジョー・ストラマーはレゲエやスカが好きだったし、プライアンはジャズが好きだったから、彼らのルーツを辿っていったら、僕ものめり込んでいっちゃったんですよ。だから自然に「アメリカ行くぞ」ってことになって。最初に行ったのは音楽のメッカでもあるテキサス。だけど一発目にジョニー・キャッシュを見たらラインダンスとかやっていて、なんか違うなと思って。次はニューオーリンズへ向かったんです。そしたら、ミュージシャンたちの演奏がとにかく上手くてビックリしたことを覚えている。その時の旅の最終目的地はブルースのメッカであるミシシッピ州のクラークデールという街に行くことだったんだけど、ミシシッピでは、『Living Blues Magazine』という雑誌の編集者で、ブルース業界では有名なジム・オニールという人の家に泊めてもらったりしていたなあ。ジムがいろんな所に連れてってくれたおかげで、沢山のミュージシャンに会うことができたよ。バックステージにも入れてもらって、カメラが大好きだったから撮影もさせてもらって。その頃に音楽評論家でもあるP-VINEの元社長の日暮泰文さんを紹介してもらい、彼の所に写真を持ってたら「君みたいな存在は珍しいから書きなさい」と言われて、『BLACK MUSIC REVIEW(現・bmr)』の後ろで400字くらいレポートを書き始めたんですよ。ちょうど20歳の頃ですね。大学の4年間は、書いてアルバイトをして、お金がたまったらまたアメリカへ行くみたいな生活をしてた。だけど評論家だけではメシを食っていくことができなかったから、大学卒業後は就職をしたんだよね。それからやっぱりアメリカへ本格的に行きたくなくて、4年間で仕事を辞めて向かった先が、サンクレメンテというカリフォルニアのサーフィンのメッカ。そこにデール・ペルジーというシェイパーのお爺さんがいて、彼に会いたいなと思ったからなんだ。その時に、石川二郎さんが立ち上げたばかりの雑誌『FREE&EASY』を紹介してもらい、取材をして原稿を書くようになったんだよね。それからは暇さえあればアメリカ中をグルグル回って。アラスカ以外はすべて回ったかな。アメリカは地図がなくても走れる自信はある。

思い出と言えば、鹿が出てきて死にそうになったことかな。夜に走っていると結構出てくるんだけど、鹿と目が合ったら、轢かない代わりに自分がスピンしちゃったの。もう少しで俺が死ぬところだった。そういう時はボンネット壊れてもいいから、轢くしかないと後から教えられたんだけどね。これは僕の人生の教訓。あともう一つ覚えている出来事が、2000年に『FREE&EASY』で、ニューメキシコへ行ってインディアンの取材をやった時のこと。現地に友達が1人いて、そいつとネイティブアメリカンのテレビの洗礼を受けに行こうということになり、お土産にヤギを持っていったら、それで儀式や、街の景色を撮らせてもらい、いい体験をさせてもらったと思って友達と砂利道を車で帰ったら、牛のどっかい糞があって思い切り避けたら、またスピンしちゃったんだよね。結構やられて、でもレンタカーだから大丈夫だろうという話になって、パンクだけ治してニューメキシコのレンタカー屋に返したの。そしたらニューメキシコのレンタカーの法律では、公道以外の事故は保険が使えないと言うんだよ。僕らはカリフォ

ルニアから来ているんだ、とねばったんだけど、結局2000ドルくらい払ったのかな(笑)。……それがアメリカですよ。すべての州の法律を勉強しないといけないということをその時に知ったよね。人に助けてもらったことも何度もある。テキサス州の外れにポートアースという街があって、そこで日曜日にバスを待ってたんだよね。ずっと来なくて、しかも雪が降り出して、凄く寒いでしょうが迷っていたら、目の前にキャデラックがバスと止まって爺さんが出てきて「田舎は日曜にバスはねえんだ」って。その爺さんが「どこから来たんだ」と聞いたら「横浜だ」と答えたら、「俺が前にいたところだ」なんて言われて。結局その人が送ってくれたの。その時のキャデラックのフニャツとしたシートに座った時の感覚が、僕の中でのアメリカなんだよね。

## ■田中流ロックンロールな表現

アメリカへ渡ってニューメキシコで糞を踏んで以来、幸運なことにとっても忙しい。この13年の間に『My Freedom』を含め、本を20冊くらい作ったんだよね。僕は10代の頃はミュージシャンになりたかったこともあって、ギターを弾くこと以外のオリジナルでロックンロールな人生を送りたかったんですよ。僕にとってオルタナティブな違う形を表現できないかなと思って制作したのが『My Freedom』。ロックンロールな生き方っていうのは「勝手にやってもやるぜ。でもケツは自分で拭けよ」ということ。……まあ、たまにカミさんや友達に拭いてもらったりするけど(笑)。ただ拭ききれないこともあるから友達は大切にして、と。その考えはアメリカ人に教わったんだと思う。みんなムチャクチャやっている人ばかりだったし、なんと言ってもアメリカのコンセプトは自由＝フリーダムだしね。フリーダムを突き詰めると「ダム(Damn)」になるということか、日本語で言うと「Damn=くそつたれ」な自由ってことなんだよ。アメリカはそういう考え方なんだよ。先日、ティノさんという60歳くらいのサーフィンのビッグウェーバーに、「30フィート(約10メートル)の波に乗る時はどんな気分だ？」と聞いてみたんだけど、「Go for it=行くしかないんだ。そこまで来たら帰るわけにいかない」と。やらないよりはやった方がいい。僕はそれに早く気が付いたから、本当に今日までやりたいことだけに時間を費やしてきた。

ヴィンテージの服に興味を持ったのは、12歳くらいの時。原宿へ行った時に、いろんなムーヴメントが起きているのを目の前で見たのがきっかけだった。思春期だからカッコつけたくて、でも金がないから古着を買ってたの。当時は古着に対する価値観もなかったし、たまたま買ったら「Levi's」のXXだったりして。その頃は、リチャード・ヘルヤル・リードとかが着ていた革ジャンも好きだったんだけど、古着でしか買えなかった。それで近所のパンクな兄ちゃんに、鉾が打ってあるハードコアパンクな革ジャンをもらったりして。それは次に出る『My Freedom』に出てきますよ。次の内容は、'80年代特集になるんだけど、'80年代は僕の青春でもあるし、カッコ良くなるきっかけに僕にとっては大切な時代だった。ピースティ・ボーイズみたいなヒップホップやハードコアパンク、マイケル・ジャクソンのようなポップアーティストが出てきたりだとか、うねりがあったんだよね。服に関して言えば、基本的に着ていて楽なものが好き。カリフォルニアに住んでいればTシャツとジーパンがあれば生きていける。だから僕は最初、Tシャツの本を作ったんですよ。ずっと革ジャンのリサーチをしていたんだけど、友達にTシャツも撮影してみろって言われて。撮っていくうちに写真がどんどん溜まってしまっただけ、お金があるわけでもなかったんだけど、自費出版という、他とは違うオルタナティブなやり方で『My Freedom』を作ったんだよね。

昔は革ジャンを100着くらい持っていたなあ。僕がものを集める時には特徴があるんですよ。例えば'79年に、最初

にリリースされたSONYのウォークマンには「GUYS & DOLLS」と書かれたジャックが二つ付いているんだけど、そういったものを僕は2個買って比べないと気が済まない。2個同じものを比べると、シールが付いている、付いてないとか、「GUYS & DOLLS」が「A&B」になっているりとか、前期モデルと後期モデルなんかがわかっていたり面白いですよ。そういう細かいことを自分の目で見て「やっぱり違ってた」ってことを繰り返して続けたいと、僕は本を作れないんですよ(笑)。

## ■金はないけど世界中にいる友の和

出版業界は厳しいと言われてるけど、それって周りもいつも数字でしか評価しないからじゃないのかな。数字が良ければ褒められる、みたいなのがわからない世の中だし(笑)。だからそれでも作りたいならまず自分に投資して、僕みたいに貯金の無い人生を送るしかない。お金ありません、全部使っちゃいました！みたいな(笑)。僕の場合、自分に金をぶち込んでどんどん遊んで、一つでもいいものがあれば世界中どこにでも飛んで行く。分かっていることは、みんな良いものは隠しているということ。だから相当気に入ったヤツにしか見せたくない。だからいいものを見せてもらいたければ、自分から自ずから人のところへ行って、相手と仲良くならなくてはいけないと思うんだよね。『My Freedom』その裏で出て来ているようなものですよ。だから僕は貯金はないけど、友達だけはもの凄くいる。それぞれの街で「一杯やろうぜ」って言う友達や沢山いるんですよ。『inspiration』は、最初は「みんなで一杯やろうよ」っていう感じで始まった、合同エキシビジョンということになるかな(笑)。おかげさまで、今年で3年目を迎えるんだけど、サバイブしながら生き延びています。

アメリカへきて13年間、毎日遊んでるけど、楽しく遊んで暮らすのも結構大変(笑)。自由に生きるのって本当は難しいことなんだよ。だけど、テメエが選んだ道なんだから好きにやれというか、そんな感じ。だから若い人に対して思うのは、やりたいことがあったらチャレンジしてもらいたいということ。こんな平和な時代だから、好きなことをやってみろって。理想は、なるべく早いうちから自分のやりたいことをやること。僕はアメリカをブラブラしながら原稿を書き続けて、ロックンロールの手法を使っていかに人と違うことをやるかっていうことが自分のやりたいことだった。もう、今ではそれ以外何もできませんという感じ。生きてる間に本を50冊出したいと思ってるから、あと30冊作ってその後はギターを練習をしたいね(笑)。ギターを沢山持っているんだよ。だからいつか友達とオジさんバンドをやりたい。そしたらまた脳天から来るんじゃないかな……ギターを買った時に主力のアンプからガツンと浴びるのが俺の好きな感覚なんだけど、あの難聴気味なガーツとくる感じ。あれは僕のロックンロールの気分というか、最高なんだよね(笑)。



**PROFILE**  
1970年生まれ。横浜出身。音楽好きが高じて渡米、20歳より黒人音楽の評論家となる。大学卒業後、4年間の広告代理店勤務を経て、'98年カリフォルニア/サンクレメンテへ移住。『FREE&EASY』などの雑誌にライター、カメラマンとして携わった後、2003年より自主出版で『My Freedom』をスタート。アメリカンカルチャーに特化したスペシャルブックは、世界的に高い評価を受けている。また2010年より現在拠点の場としてのロサンゼルスにてアメリカンカルチャーを中心としたエキシビジョン「inspiration」を開催。vol.3となる本年度は、2月9日~11日までロサンゼルス/ロングビーチ、クイーンズリーにて開催予定。  
<http://myfreedomn.com> <http://inspirationla.com/>